

インドのおどろき

小 谷 信 千 代

今日は「インドのおどろき」という奇妙な題でお話しをさせていただきます。仏教を学ぶためには人間生活の現実を直視することが大切だということをレジメに記しています。最近勉強していてそう思うことがよくありました。それで今日はそういうお話しをしてみたいと思っています。

例えば、わたしは戦争を直接経験していない世代に属すると言つてよいかと思えます。終戦直前の頃、母親に背負われて逃げ回っていたそうです。ですからわたしの中には、人間の生活ということに関して、戦争のような大変な経験があるわけではなく、平和に暮らせて当たり前というような、安易な考え方があります。現にわたしたちは恵まれた生活をしています。食べ物にしても、生活用品にしても、いろんなものが沢山ある、潤沢な生活をしています。みなさん方もきつとそういう中で育つてこられたのだと思います。ですからテレビでもごらんになつていられるように、中近東だとかイラクとか世界のあちこちで戦争が起こつていて、大変な目にあつておられる人たちがいることはよく知っています。自分の上にも起こり得る現実のこととして感じられるかといえは、なかなかそうはなりません。きつと今日の日本のように六十年間も安定した平和な生活が続いたということは、歴史上でもあまり例のないことではないでしょうか。人類は大変な目に遭いながら生活をしてきたのでしようし、そういう生活の中からもいろいろな文化を

築いてきたのであろうと思います。そしていまわたしたちはかれらの残してくれた文化を学んでいるのです。仏教学もそうですし、哲学もそうです。歴史にしても、東西の文学もそうですし。そういう人間の生活に関わるような学問をわたしたちは学ぶわけです。そういう学問を人文科学と呼びますが、そういう領域の学問には、人間の生活の困難さをどこかでちゃんとわかっているといないと、理解しにくいという側面があるのではないかと思います。本を一所懸命読むということも大切なことですが、それだけでは、本当に本が言おうとしたことがつかみきれないという側面があるのでないかと思えます。みなさんがこれから学ぼうとしておられる仏教学にもそういうことが言えると思います。

今日そういうお話しをしようと思っただけは、堀田善衛さんの『方丈記私記』を読んだことにあります。『方丈記』はみなさんご存知のように鴨長明の書いた文学作品です。最初の一節を引いてみます。「ゆく川の流れば絶えずして、しかも、もとの水にあらず、淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。」みなさんも暗唱させられた記憶があるのではないでしょう。有名な文章です。その『方丈記』を題材にして書かれたものです。

鴨長明は平安末期から鎌倉初期にかけて活躍した人です。鴨長明が亡くなったその年に親鸞聖人がお生まれになったとされるように、お二人はほぼ同時代の人です。法然上人や日蓮聖人とほぼ同時代の人です。堀田さんは鴨長明を、常に現実を直視している人として評価しています。方丈記という文学作品が非常に優れているのは、鴨長明が現実生活をしつかりと見据えており、常にクールな目でよく物を見ている、そういう点にあると評価しています。親鸞聖人のことはその本の中には、二、三方所くらいしか出てきません。かなり長い作品ですが、それもことのついでにというふうな仕方では触れられています。しかしかなりインパクトのある言い方で、この時代に人間の現実生活を見据えた人には鴨長明と親鸞聖人しかいないのだというように言われていて、わたしには非常に強い印象を与えました。では、

どういふ風に鴨長明が現実生活を見ていたかという例をご紹介します。

かれは京都の下鴨神社の神職の次男として生まれています。ですから生まれたときはお坊ちゃんだったわけですが、やがて自分が住んでいた家をどんどん畳んで、最後は四畳半（方丈というのは四畳半）つまり畳四枚と半分の広さしかない、掘つ建て小屋みたいな、それも組み立て式でいつでも移動できるように自分で拵えた建物に住むこととなります。そういう狭い所に最後は住んで、そこで方丈記を書くという、そういう人生を送った人です。長明が若い頃に経験したことが方丈記には描かれています。例えば、平清盛が京都から神戸の福原に都を移しました。遷都しました。その時に長明は別に用事があるわけではないのですが、神戸までのこのこと出かけて行って、建築途中の、まだ出来上がっていない福原の様子を見てそのことを書いています。

また、その時代は京都の街の中でもしょっちゅう火事が起こったり、大飢饉が起こっています。農作物がとれないものですから、飢え死にをする人がたくさん出ます。地震が起こる、台風がくる、火事が起こる、悪疫が流行する、源氏と平氏の戦いが起こる。また、泥棒があちこちに出没する。そういう大変な時代なのです。そういう事件が起こったときに長明は必ずその場所へ出かけていって、その様子を克明に記憶しています。ですから、ずつとのちに晩年になって記された方丈記の中に描かれている火事の有様や悲惨な状況の記述が、まるで昨日のことを描いているように非常に克明に具体的に描かれていると堀田さんは言います。

それでは長明がどのように描いているかということを紹介いたします。仁和寺の隆暁法印という偉いお坊さんがおられました。大飢饉が起こって京都の街中に沢山の死者がうち捨てられ、賀茂川の土手をはじめとして、大きな街の通りにおびただしい数の死体が放置されている、そこへ行つて隆暁法印が死者の額に梵字（悉曇文字）で阿という字、阿字と言うのですが、それを書いていった。供養つまり死者と仏さんとの縁を結ばせるために阿字を書いていた。その数が四月と五月の二ヶ月間で四万二千三百人余りにもなったと書いてあります。四万二千三百ほどの死体

が左京区くらいの広さの所にごろごろしていたと言うのです。その様子がありありと描かれている。それもやはりそういうことを隆暁法印がしているという話を聞いて、鴨長明がそこへ出かけて行ってその様子を見て書き記したと堀田さんは言っています。

そういうようにかれはいわば現場主義というか現実を見るということを非常に大切にしている、そういう性格だったのでしょう。人間の現実を見ずにはおれないような人だった。そういう大飢饉だとか台風とか大火で、一般民衆は生きるか死ぬかというような悲惨な状況にあつたのです。それでは当時の文化人達はどうかであつたか。当時の文化人としては、朝廷に仕える貴族たちがいます。そしてその貴族の中から和歌が詠める才能を持った人が、天皇に呼び集められて寄人という組織が作られています。さらには僧侶がいます。その僧侶たちも今とは違って、いわば国家公務員みたいなものです。朝廷が僧侶の資格を与えるのです。

そういう人たちがどういう生活をしていたか。当時の大臣の藤原兼実という人の『玉葉』という日記が残っていますが、そういう物を見ると当時の文化人たちの生活がよくわかると堀田さんは言います。堀田さんはその中にどういふことが書いてあるかということも紹介してくれています。おおかたの内容は朝廷でどういう儀式、あるいは天皇が何時どこへ出かけていったか、そして出かけていったときに、お付きの人たちがどういう車に乗ってどういう服装をしていたか、どういう輿が使われたか、というようなことが事細かに書かれています。それから朝廷での儀式の順序次第も細かに書かれています。藤原家は有職故実といって、朝廷の営む行事をきちんと記録して、自分の子孫に伝えていくということがその家の仕事でもあるという側面があるので、仕方がないのでしょうが、玉葉は日記ですから、個人のことも書いているのですが、大方はいま挙げたようなことで埋め尽くされていて、京都の街の人々がどれだけ困っているか、どれほど悲惨な状況にあるかということとはほとんど書かれていないと言っています。また、藤原定家の『明月記』という日記があります。定家はみなさんもご存知のように、当時の一番優れた和歌の読み手、歌人だと言

われている人です。その『明月記』にもおよそ庶民の悲惨な生活ぶりが反映している歌なんて一首も出てこない。『千載和歌集』や『新古今和歌集』という、天皇の勅命で当時のすぐれた歌を選んで編まれた歌集があります。非常に完成度の高い優れた芸術作品であると言われています。堀田さんもそのことは認めています。けれども、その中には、今申し上げたような庶民の暮らしぶり、困っている様子の反映している歌は、一首もないと言っています。このことからしても、当時の文化人には一般民衆の生活の現実というものがおよそ見えていなことが分かると言っています。

例えば、定家は日記の中で、「紅旗征戎 吾が事にあらず」と記しています。「紅旗征戎」の紅旗とは朝廷の軍隊が持っている旗、戎というのは平家のこと、朝廷が平家を亡ぼすということです。そういう戦争が起ころんという話が伝わってきた。けれども、そういうことは「吾が事に非ず」、俺の知ったことではないと言いつつ切っているのです。それを十九歳の定家が言っているのです。ちょうどみなさん方の歳ですが、今の十九歳と昔の十九歳とはかなり違うでしょう。昔は十五歳で元服しますから、十九歳というのはもう大人です。それにしても十九歳にして、戦争が起ころうが世の中がどうなるうが、そんなことは俺の知ったことじゃないと言いつつ、それはやはりかれの人の柄のいびつさを表しているという感じがします。かれは自分が文学の人であることを、はつきりと自覚し、その道に専念しようとしているのでしよう。そうやってかれは優れた歌を詠んでいるわけです。それがかれの生活態度であり、人生の送り方なのです。

鴨長明は身分は低いのですが、歌を詠むのに優れていて、特に取り立てられて後鳥羽上皇に寄人選ばれて歌人の仲間入りを許された人です。その中の十首ほどが『新古今和歌集』に入れられることになりました。それは歌人として最高に名誉なことです。ところがかれは、それはすごく名誉な嬉しいことであるにも拘わらず、「ただあわれ、無益のことかな」と言っています。確かに選ばれたことは嬉しい。その気持ちに偽りは無い。しかし実につまらない事

だと言っているのです。『新古今集』に選ばれたことをいっぼうでは名誉な、嬉しいことであると言いながら、もういっぼうでは無益なことだと言っているのです。かれはその時代の優れた芸術家たちをそういう目で見ているのです。無益なことをしているなあと。それがかれのものの見方です。

政治に携わった貴族たちの考え方を示すものには、『玉葉』や『明月記』など日記類などの作品が残されています。そういう作品には、その時代の文化人たちが、昔から自分たちの時代に至るまで伝えられてきた伝統やしきたりを、そのまま引き継いで次の世代へと伝えることこそ、自分たちの任務であるとする考え方が色濃く反映しています。また芸術家たちの考え方を示すものには、技術的にはとても優れている『千載和歌集』や『新古今和歌集』などの歌集が残されています。どういう技法が優れているかという点、本歌取りだと言います。つまり、優れた本歌があつて、新たに歌を詠むときには本歌をちゃんと知っていて、その歌のどれかの言葉を使って新しい歌を作る技法です。悪く言えばパロディみたいなものです。いまの言い方で言えばばくりみたいなのです。堀田さんの解釈ではそうなりません。つまり新たにものを作っていく、創造力というものがないかというのが堀田さんの批判なのです。昔の歌の言葉をよく知っていて、その言葉をうまく使って新たに歌を作っていく。その技術を磨くことにのみが歌人の努力が注がれている。そうやって作られた歌です。堀田さんの目から見たら創造力という点、新たにものを作っていくバイタリティという点、その力の感じられない歌ばかりが、『千載和歌集』や『新古今和歌集』には載せられていると見えるのです。それゆえ長明はそこに選ばれはしたものの「ただあわれ、無益なことかな」と言わざるを得なかったんだと堀田さんは言うのです。それが長明のものを見る目です。そのようにかれはいつもクールに社会のこと、人間生活のこと、人間のことを見通しているのです。そう視点から書かれた作品だから『方丈記』は非常に優れているのだと堀田さんは言います。そういう意味で現実を直視した人として長明のことを述べつつ、親鸞聖人のことに触れているのです。親鸞聖人に関してはおもしろいことを言っています。親鸞聖人は越後に島流しに遭うのですが、

もとは、比叡山で仏教を学んでいました。当時の比叡山は今で言えば東大や京大のような、最高のエリートたちが勉強していた場所です。そこを棄てて法然上人の許に行き、やがて田舎に流されていったわけです。

堀田さんは、ものを考えることを自分の一生の仕事にしようなどという思い上がった人間は、鳥流しにでもならないと、ものの現実や真実というものが見えないのだというような言い方で、親鸞聖人のことに触れています。親鸞聖人が人間というものの現実が初めて見えたのはなぜかというと、それは鳥流しに遭ったからだと言うのです。そういうことがなかったら、学者とか僧侶というような、ものを考えることを一生の仕事にしようと思うような思い上がった人間には、人間の现实生活というものとても見えないのだと言うのです。親鸞聖人は自分で選んだわけではなく、朝廷の命によって鳥流しに遭ったわけですが、そのことが聖人の目を開かせたのだ、人間の現実を直視することができますようにさせたのだと、そういう風に言うのです。それはおもしろい考え方だと思います。堀田さんは、现实生活を直視し、人間というものがどういふ存在であるかということをし正しく見ていくという姿勢がなければ、いくら机に向かつて勉強したからといって、いくら芸術の高度な技術を身につけたからといって、それは人の心を打つような本物にはならないのだと、言おうとしているのだと思います。

最初に申し上げたように、仏教を学ぶためには、人間生活の現実を直視することが、きつと欠かせないこととして皆さんにも問題になってくると思います。わたし自身も長年勉強してきて、いま申し上げたような形で明瞭に意識したわけではありませんが、いまとなつてはそういうことを問題意識としてもっていたのだと思います。しかし現実を直視する、凝視するということは難しいことです。言葉で言うほど容易なことではありません。先ほども申し上げたように、わたしたちは恵まれた生活の中にいます。恵まれた生活が人間の生活として当然のことのように思っています。幸福な生活が送れることを当たりまえのように思っている考え方で、果たして宗教や哲学や芸術を本当に理解していけるのだろうか疑問に思います。しかし堀田さんが言うように、鳥流しに遭うわけにもいきません。わたしも

これまで特にこれという問題もなく、幸せな人生を送ってきましたが、そういう人生の中でもそれまで経験したことはないような悲惨な情景を目の当たりにして驚いたことが幾度かあります。そしてそれが後になって人間生活の困難な現実をかいま見せてくれた貴重な経験であったことに気づいたことがあります。そういう経験の一つとしてインドに行った時のことをお話ししようと思います。

大谷大学では、インド研修という授業の一環として、毎年学生をインドに送っています。わたしが団長として引率して行った時は、百人ほどの学生が二班に別れて行きました。研修の時期は八月の下旬から九月の初旬にかけての二週間ほどです。お釈迦さまが悟りを開かれたブツダガヤや、初めて説法をされたベナレスや、お亡くなりになったクシナガラにお参りします。三八度もあるような暑い時期ですから大変です。バスはクーラーの調整が悪くて、使わずに暑さに耐えるか、使って寒さに耐えるかのどちらかになります。暑さに耐えられずクーラーを効かせて、その結果殆どの人が風をひいたり喉をやられたりします。その折に声が出にくくなって、今でもその影響が残っています。声が出にくくなったのも嫌なことでしたが、それよりも気の重くなる、帰国してからもかなり長い間、おおかた三ヶ月ほども重苦しい気分が続いた事があります。そのことをお話ししようと思います。

デリーとかニューデリーというような大都会に行くと、必ず物乞いをする人たちが寄って来ます。小さな子供達がいつぱいやって来て、「一ルピー、一ルピー」とせがみます。貨幣価値が日本よりずっと低いので、乞われる額を与えたからといって日本のお金にすれば取るに足らないような額です。しかしインド人のガイドさんから物を与えることを厳しく禁じられています。インド人が物乞いをするのは、あなたがた観光客が悪い癖をつけたからだと言われました。われわれ日本人の観光客にも責任の一端はあると言われます。ですから、われわれは施しをすることができません。女子学生たちは、可哀想になってつい物を与えたりします。そうすると大変なことになります。

バス旅行の途中、車中で昼食に大きな弁当が出ました。パンや鳥の腿焼きやバナナやリンゴなど食べきれないほど

入っています。わたしも食べきれずに残りましたが学生たちも残りました。学生たちはその食べ残しを透明のビニールの袋に入れていました。カルカッタの駅で汽車を待っている時に、ある女子学生がついっかかりして、仲良しになった子供にその袋からバナナを取り出して与えました。すると他の少年たちがそれを取ろうとしてその子供に襲いかかりました。子供は取られまいとしてバナナを抱え込むようにして屈みました。すると見ている間に多くの少年たちが子供のの上に覆いかぶさって山積みになりました。かなり大きな少年までそれに加わって危険な状態になりました。驚いていますとホームにいた警官が走って来て少年たちを制止して子供を救い出してくれたので、なんとか事なきを得ましたが、まかり間違っていたら大変なことになっていたと思います。そういうこともあるからでしょう、インド人のガイドさんは物を与えないでくださいと厳しく注意したのだと思います。しかし物乞いをしている子供たちの間を、彼らの姿を見ない振りをして通り過ぎることは、かなり気の重いことです。学生たちに見れば、せがまれている金額の一ルピーは日本円にすれば三円ほどですし、子供たちが指を指してほしがっているものは自分たちには食べきれないものなのですから、与えたいという気持ちにどうしてもなりません。にもかかわらず、かわいそうな子供たちに何も与えないで、知らない顔をして行くということは、気の弱い学生には堪え難い思いがするでしょう。

デリーだったか、ニューデリーだったか、そこでもバスが着くとすぐに子供たちが群がり寄って来ました。その中に、底の浅い木の箱に車をつけて、それを舟のように棒で漕いですごい早さでやって来る少年がいました。二、三人いたように思います。初めは遊びでやっているのだと思っただけでしたが、そうでもないようです。それでガイドさんに聞いてみますと、脚が悪いのだと言います。インドは医療が遅れているので、今でもそういう子供が多いのでしょうねと言いますと、ガイドさんそうではないと言います。そうではなくて、あのように脚が悪いと物乞いがしやすい。観光客はそういう子供の姿を見ると施しをせざるを得なくなる。それで母親は子供が生まれたときに脚を折ったのだ。そういうことはよくある話だと言うのです。それを聞いて一瞬啞然としました。少年が物乞いをしてもら

う収入の方が、かれの父親が働いて得る給料よりはるかに多いと言います。だからかれは一家の稼ぎ手として、生まれた時に脚を折られて物乞いをしているというのです。インドの貧しさについてはテレヴィで見たり、友人から聞いてもいましたから、それなりに知っているつもりでしたが、本当にそういう国であるということをその時はじめて分かったように思いました。

インドで嫌な気分を味わったものに、物乞いの外に、強引な物売りにつきまとわれたことがあります。押し売りに来る品物の大半は、およそ買って帰っても使えないような物です。数珠のような物を腕にたくさんかけてきて、それを全部買えば安くすると、巧みな日本語で話しかけてきます。インドでは定価などというものはなくて、すべてやり取りで値段が決まります。わたしにはそれらの品物の価値が分かりませんから、どうしてもだまされたという気分になります。二十倍ほどの値段を吹っかけてくるようです。そんな相手と交渉などして嫌な思いをしたくないので、わたしはかれらが来るとともかく逃げます。ひたすら逃げ回っているのです。しかし学生たちは違います。わたしのクラスの学生が一緒に行っていたのですが、かれらを見ていますと、驚いたことに、物売りの人を「おっちゃん、おっちゃん」と言って呼び寄せようとしているのです。すると、そのおっちゃんは逃げて行くのです。どうやら、おっちゃんと呼ばれた物売りはかれらに安く買い叩かれて、かれらを相手にすることに懲りたようなのです。かれらは買い物をするを一種のゲームのようにして楽しんでいるのです。それには押し強いインド人もびっくりしたのでしょう。

あるときマーケットに行くのに、輪タクといって自転車の後ろに乗車台を付けた乗り物で出かけたことがあります。わたしはインドに何度も来て事情がよく分かっている先生と同行したので、値段の交渉はその先生に任せていました。途中で、女子学生三人と体格のよい男子学生との四人を乗せて走る輪タクと出会いました。学生たちは嬉しそうな表情をしてわたしたちに手を振ったりしていました。輪タクを運転しているおじさんはかなり力を入れてこいでいる

ようです少し苦しうでした。ホテルに帰って女子学生の一人に会ったので、マーケットまで幾らで行ったかを尋ねますと、わたしたちの支払った三分の一か四分の一の料金で行ったと答えます。四人でその料金ではちよつとかわいそうではないかと言いますと、出かける前にちゃんと交渉しておじさんがそれでよいと言うのだから、それでいいのだと答えます。日本では物の定価が交渉で変わるといふことはあまりありませんが、インドではそれが通常です。そして学生たちにはそれが楽しいようです。わたしには苦痛なのですが、かれらにはそれが結構楽しいのです。インドでは学生たちのように思考が柔軟でなければ楽しめないようです。皆さんはお若いのですからインドに行けばきつと色々を楽しみを見つけられることと思います。是非いつかインド研修に参加してください。

とは言え、わたしも幾つか楽しい思いをしたことがあります。バスで移動するときは大平原の中を何時間もかけて延々と走ります。そういう所には公衆便所などありませんから、ガイドさんが用を足したくなつたら手を擧げてくださいと言います。手を擧げると、トウモロコシ畑を見つけてバスを止め、そこで用を足します。女子学生たちは二、三人ずつ連れ立ってトウモロコシ畑に入って行きます。初めは恥ずかしげに行っていた女子学生たちも、やがて慣れてきて、トウモロコシ畑が見えてくると嬉しそうな顔をして手を擧げます。畑のまん中で青空のもとでおしっこをするとても気持ちがいいから、先生もやってきなさいと勧めてくれたりします。

そういうようにして、バスはお釈迦さまの亡くなったクシナガラへと向かつて平野を走っていました。大きな夕日が地平線の彼方に沈み、夕闇に覆われて周りの景色がよく見えなくなっていました。所々に農家の明かりがぼんやりと見えます。バスが速度を落として走っているときに数軒の農家の前にさしかかりました。軒先きにもれて来るうす明かりの中に人影が黒く見えます。何をするでもなく数人の人がただ寝そべっているのです。そのゆつたりとした光景を見るときもなく見ていると、わたし自身の気持ちがあくつるいで、何とも言えずのんびりとした気分になります。時間が非常にゆつくりと過ぎて行くような気がします。現在の日本の家庭では味わえないような時間の進み方を味わっ

ているように思われます。かつて子供の頃、夏の夕暮れ時に庭の床几に腰掛けて、手持ち無沙汰な時間をぼんやりと過ごしたことを思い出しました。しかし今では、わたしたちの家庭は、夏休みの夕方でもお母さんは忙しく、お父さんはまだ帰宅せず、子供は塾から帰っていません。時間追われたり、新聞を読んだりテレビを見たりと、常に何かをしていなければなりません。時間に追われるばかりで、何もせずにゆつくりと時間を過ごすという事はなくなっています。インドの農家の軒先さのうす明かりの中に見た、ゆつくりとした時間の流れは、きつとわたしたちの先祖もつい最近まで味わっていた生活のリズムであつたと思います。ふと学生たちは一体どうしているかと思つて後ろの席を見てみますと、かれらもうつとりとしたような表情でその光景を眺めています。そのリズムのなごりがまだ学生たちの体の中にも残っているものですから、インドの農村の光景にみな心を奪われているのだらうと思ひました。今でももう一度味わつてみたいと思ふ光景です。

しかしあとから振り返つて考えてみますと、インド研修でわたしが経験した一番大事なことは、現在の日本では普段目にする事のない人生の悲惨さ、いわば人間生活の現実を、まのあたりにしたことであつたと思ひます。人間が一生を送つていく間には、色々大変なことが起こります。現に世界のあちこちで起こっています。しかし幸福な生活を送っているわたしたちには、その悲惨さが現実感を伴つて迫つてはきません。そういう生活感覚の中では幸せな生活を享受し得ることがまるで当然なことのようになつてしまふのです。人間の生活は本来そうではないということをインド研修は教えてくれました。インドの人々の悲惨な姿を眼にした驚きが与えた重苦しい気分こそ、ともすれば現実を凝視することを忘れ勝ちなわたしの安易な考え方に歯止めをかけ、なんとか人間生活の現実を直視するための努力をするのに役立ってくれるように思ひます。

(本稿は二〇〇四年四月二三日に行つた新入会員歓迎講演に講者が加筆訂正したものである。)